

ソーシャルメディアコンテンツにおけるトピックと社会的影響力の推定

経済学研究科 経営学系専攻

准教授 五十嵐 未来

Researchmap https://researchmap.jp/mirai_igarashi



研究の概要

本研究は、ソーシャルメディアなどで投稿されるユーザー生成コンテンツ（UGC）をトピックモデルと呼ばれる数理モデルで表現することを目的としています。これによって、音楽やファッション、テクノロジーといったトピックがUGCにどの程度含まれているのか（トピック分布の推定）、そしてそのようなコンテンツの投稿がソーシャルメディア上のネットワークを通じてどのように伝播していくのか（社会的影響力の推定）を明らかにすることができます。Pinterest 画像データを用いた実証分析では、提案モデルが従来のトピックモデルに比べて予測精度とトピック解釈性の両方で優れていること、また、推定したトピックごとに影響力の高いユーザーを特定することで、Seeded Marketing Campaigns (SMCs) の効率を改善することが示されました。

研究の意義と将来展望

本研究の意義としては、解釈性を保った形での予測精度の向上によって、アパレルなど製造業における市場トレンド把握や需要予測、効率的な生産計画といった領域に寄与することが考えられます。また、ソーシャルメディア

ア上での影響力を加味したターゲティング戦略による SMCs の効率性向上は、市場トレンドに介入する際の戦略立案に関する指針を提供していると考えられます。将来的には、より大規模なデータを扱えるモデルへと拡張することで、ソーシャルメディア上のユーザープロファイリングの高度化が期待されます。



図1 トピックによる社会的影響力の異質性

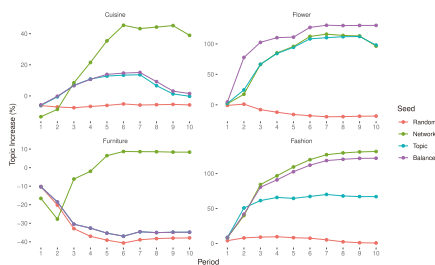


図2 SMCs シミュレーション実験におけるトピック増加率の比較

特 許

論 文

Igarashi, Mirai; Zhang, Kunpeng; Terui, Nobuhiko et al. Identifying influential users by topic in unstructured user-generated content. *Production and Operations Management*. 2025, 34(10), 3267-3288. doi: 10.1177/10591478251332335

参考URL

キーワード

ユーザー生成コンテンツ、社会ネットワーク、社会的影響力、トピックモデル、インフルエンサー



精神疾患のある方が「家族をつくる」ことを支援する研究プロジェクト

高等共創研究院

教授 蔭山 正子

<https://researchmap.jp/kagemasako>



研究の概要

精神疾患を罹患していても、家族（大切な人）をつくるという選択ができ、家族全員が自分らしい人生を送れるように支援を整える研究プロジェクトである。複数の調査を行い、精神疾患のある人と家族のニーズや支援する専門職の困りごと・対処方法を把握した。その知見をもとに、精神障がいを抱えながらの子育て支援研修プログラム「ゆら育プロ」（育児支援）、愛する力を磨くピア学習プログラム「あいりき」（恋愛・結婚支援）、精神疾患のある人のリカバリーに向けたセクシュアリティ・サポートプログラム「リカセク・サポプロ」（セクシュアリティ支援）の3つのプログラムを開発した。

を望む人は増えると考えられる。将来的には、専門職による結婚支援、企業の配偶者支援、行政や医療の周産期メンタルヘルス対策などでの社会実装に発展させたい。



写真1. 「あいりき」の実施場面

研究の意義と将来展望

精神疾患は生涯で5人に1人は罹患するありふれた疾患である。思春期に好発するために家族をつくるというライフプランに影響を及ぼすことがある。従来の家族支援研究は、親との関係に焦点が当たっていたが、本プロジェクトは、より前向きに家族をつくることを応援するものである。ケアが入院から地域生活中心へと移行する中で、好きな人ができ、結婚し、子どもをつくり、家族と暮らすこと

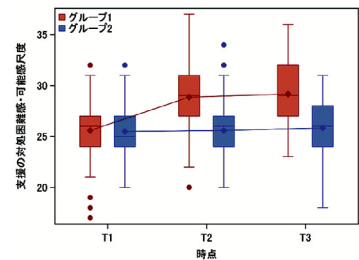


図1. 「ゆら育プロ」受講前後のグループ1（介入群）とグループ2（対照群）

特許

論文

Kageyama, Masako; Yokoyama, Keiko; Ichihashi, Kayo et al. A peer-led learning program about intimate and romantic relationships for persons with mental disorders (AIRIKI): Co-creation pilot feasibility study. *BMC Psychiatry*. 2023, 23, 767. doi: 10.1186/s12888-023-05254-1

Kageyama, Masako; Koide, Keiko; Saita, Ryotaro et al. A randomized controlled study of an e-learning program (YURAIKU-PRO) for public health nurses to support parents with severe and persistent mental illness and their family members. *BMC Nursing*. 2022, 21, 342. doi: 10.1186/s12912-022-01129-0

蔭山正子, 高橋幸子, 市橋香代他. 精神疾患のある人の性と生殖に関する実態. *日本看護科学学会誌*. 2024, 44, 763-776. doi: 10.5630/jans.44.763

参考URL

<https://kageyamaresearch.wixsite.com/srhr>
<https://kageyamaresearch.wixsite.com/airiki>
<https://kageyamaresearch.wixsite.com/yuraiku-pro>


キーワード

精神疾患、家族、恋愛、結婚、育児

主体的な意志・意欲に関わる心理プロセスの理解と教育実践開発への応用

人間科学研究科

准教授 後藤 崇志

 Researchmap https://researchmap.jp/g_ikuyakat


研究の概要

人の主体的な意志・意欲に関わる心理プロセスについて、特に教育・学習場面との関わりに注目して研究しています。基礎研究においては、「主体的に取り組もうとする意志・意欲は、どのような経験を通して形成されていくのか」という問いについて、自己制御・内面化・統合といった個人内過程だけでなく、規範や養育といった社会環境の影響も含めて検討しています。応用研究においては、「教育・学習環境が主体的に取り組もうとする意志・意欲を持つことができるものになっているか」という観点から分析し、新たな教育・学習環境を設計・評価することに取り組んでいます。2025年現在は、科学教育・法教育や、探究学習・ICTを利用した個別最適な学習などの教育実践を対象とした研究に取り組んでいます。

研究の意義と将来展望

日々の活動に主体性をもって取り組むことは、その活動の成果を高める面でも、個人の精神的健康の面でも、重要な要素です。しかし、人が他者と社会生活を共にしていくためには、制度や規範に従ったり、教育を受けたりすることが求められ、必ずしも個人の志向とは合致しない活動に取り組まなければなら

ないこともあります。人の主体的な意志・意欲に関わる心理プロセスを明らかにし、その視点から教育・学習環境などの現実の場を分析・創造していくことで、個人の幸福と、社会の持続的発展との双方を実現する社会設計に貢献していきたいと考えています。

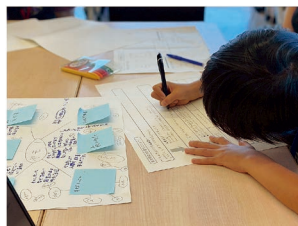


図1. 探求活動を支援する実践での参加児童の取り組みの様子（関連する実践の詳細は後藤他（2025）で報告）



図2. 商業施設で実施した遊び（スーパーボールすくい）をきっかけとした科学教育プログラムの様子（詳細は後藤・加納（2021）で報告）

特許

Goto, Takayuki; Nakanishi, Kazuo; Kano, Kei. A large-scale longitudinal survey of participation in scientific events with a focus on students' learning motivation for science: Antecedents and consequences. *Learning and Individual Differences*. 2018, 61, 181-187. doi: 10.1016/j.lindif.2017.12.005
 後藤崇志. 「セルフコントロールが得意」とはどういうことなのかー「葛藤解決が得意」と「目標達成が得意」に分けた概念整理. *心理学評論*. 2020, 63(2), 129-144. doi: 10.24602/sjpr.63.2_129

論文

後藤崇志, 加納圭商業施設での科学ワークショップの参加者層評価ー科学への関心・意欲の多様な層のワークショップ参加を目指した試み. *日本教育工学会論文誌*. 2021, 45(1), 113-126. doi: 10.15077/jiet.44059
 Goto, Takayuki. Brief research report: The impact of a utility-value intervention on students' engagement. *The Journal of Experimental Education*. 2024, 92(4), 713-722. doi: 10.1080/00220973.2023.2229757
 後藤崇志, 西森年寿, 村上正行 (編). 基礎と事例で学ぶ 教育工学のすすめー「学ぶ」「教える」の探究から新しい実践を創る. ナカニシヤ出版. 2025. ISBN: 9784779518867
 後藤崇志, 高津遥, 倉島七海他. 課題価値と「理科の考え方」に着目した自由研究の課題設定と計画立案の支援. *日本教育工学会論文誌*. 2025. Advance online publication. doi: 10.15077/jiet.49016

参考URL

<http://g01beza.web.fc2.com>
<https://www.hus-et.net>

キーワード

モチベーション、セルフコントロール、探究学習、教育工学



新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が我々の働き方に与えた影響とは？

経済学研究科 経済学専攻

教授 佐々木 勝

https://researchmap.jp/masaru_sasaki

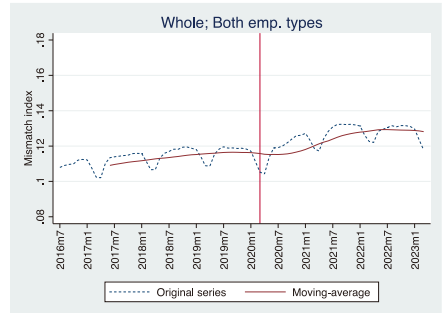


研究の概要

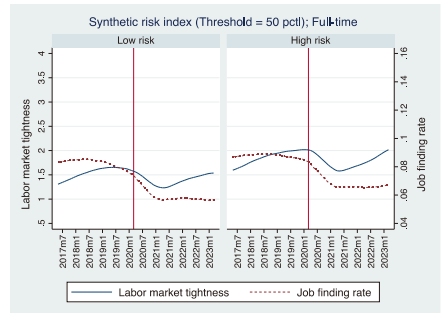
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が第5類感染症に移行してから約3年が経過しました。感染症の脅威が人々の記憶から薄れる中でも、本パンデミックがもたらした影響を振り返り、今から次回のパンデミックに備えることが重要です。本研究では、COVID-19が日本の労働市場における雇用ミスマッチを悪化させた影響を分析しました。感染リスクは職業や雇用形態によって異なり、特に人と接触する機会の多い職業ではリスクが高まります。そこで、当研究では感染リスクによる職業別・雇用形態別の求職・求人動向を調査し、職業別のミスマッチ指数を推計しました。

研究の意義と将来展望

本研究の意義は、COVID-19が日本の労働市場に与えた影響を職業別、雇用形態別に定量的に分析し、感染リスクやリモートワークの可能性による差異がミスマッチを悪化させたことを示した点です。また、パンデミック期間中に政府が実施した雇用調整助成金がミスマッチに与えた影響について、改善または悪化の可能性を示唆し、将来の研究課題として残されています。次回のパンデミックに備えるため、労働市場の動向を客観的に把握し、政策立案に役立つ知見を提供する研究をさらに進めていく予定です。



主要図表1：Figure 4 (a) 雇用ミスマッチの推移¹⁾



主要図表2：Figure 2 (a) 労働市場逼迫率と就職確率の推移¹⁾

特許	
論文	
参考URL	
キーワード	


1) Higashi, Yudai; Sasaki, Masaru. Did COVID-19 deteriorate mismatch in the Japanese labor market? Japan and the World Economy. 2025, 76, 101331. doi: 10.1016/j.japwor.2025.101331



責任ある研究開発のためのエシックスバイデザインと ELSI 人材の育成

CO デザインセンター／社会技術共創技術センター（兼任）

特任講師 鹿野 祐介

 <https://researchmap.jp/shikanoy>



研究の概要

AI やバイオテクノロジーなど、先端科学技術の急速な進展は、社会に新たな価値をもたらす一方で、倫理的・法的・社会的課題 (ELSI) をも生み出している。

本研究では、こうした課題に応答するため、研究開発の初期段階から倫理的視点を設計に組み込む「エシックス・バイ・デザイン」の理念を踏まえて、研究開発の現場で活用できる対話協働型の技術評価フレームワークと評価手法を開発している。これにより、研究者や技術者が自らの研究開発を社会の視点から問い直し、責任ある研究開発を実践する力を育むことを目指している。

研究の意義と将来展望

本研究は、科学技術の ELSI を単なるリスクではなく、研究開発を社会的に深化させる契機や価値創出の機会と捉え、実践の中で「責任ある研究開発」の視点を育む。また、本研究の取り組みは、研究の知見が技術評価の手法へと発展し、その手法が教育や研修を通じて人材育成に還元され、育成された人材が再び研究開発の現場を変えていく、という循環を軸に展開していく。このエコシステムは、ELSI を見据えた「責任ある研究開発」文化の形成を支えるとともに、科学技術と社会を

つなぐ新たな協働の仕組みとして機能する。今後は、大学・企業・行政が共創する場を通じて、こうした技術評価と対話的協働に基づく ELSI 人材育成を発展させ、イノベーションと人材育成の好循環を広げていくことを目指している。



図1 「モラルITデッキ」のカードセット一覧



図2 (写真)：大学教育における授業風景：技術評価フレームワークを用いたワークショップ

特許

論文

カテライ・アメリカ, 鹿野祐介, 標葉隆馬編. 「ELSI入門：先端科学技術と社会の諸相」. 丸善出版, 2025年
鹿野祐介 ほか「産学連携での ELSI 研究における人文社会系研究者の役割：大阪大学 ELSI センターと mercari R4D による社会技術の共創」『研究 技術 計画』. 39(3), 263-280, 2024年
鹿野祐介 ほか「インパクトアセスメントツール「The Moral-IT Deck」の日本語化とワークショップの方法」. 『ELSI NOTE』 37. 1-29, 2024年

参考 URL

https://elsi.osaka-u.ac.jp/program_tool/2534
<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2024/001193.html>

キーワード

エシックス・バイ・デザイン、科学技術ガバナンス、責任ある研究・イノベーション (RRI)、協働形成、ELSI アセスメント



月経をめぐる ウェルビーイングにむけた社会デザイン

人間科学研究科 共生学系グローバル学講座

教授 杉田 映理

Researchmap <https://researchmap.jp/read0155208>



研究の概要

現代社会においてジェンダー平等は重要な理念として掲げられています。このふわりとした理念を日々の生活に落とし込んで考えた時、「月経」という壁を乗り越える必要性に気づかされます。私はこれまで、月経をめぐるウェルビーイングを目指した研究と実践を行ってきました。その実現のための具体的なアプローチとして、次の2本柱で活動を展開しています。

(1) **生理用品がトイレ内に常備されるしくみづくり**がその一つです。生理用品無償提供用のディスペンサーを開発し、段ボール製・組立式にすることで、避難所や学校等どこでも設置し易くしました。現在、他団体のご協力を得ながら普及が進んでいます。2024年の能登地震の際には避難所のトイレに設置し、

大阪・関西万博の一部のトイレに導入して実証研究を行いました。

一方で、月経が秘め事となりがちな日本では、月経（特に月経対処）についての知識と意識を高めることが、月経をめぐるウェルビーイングに繋がると考えられます。そこで (2) **月経教育を再検討する研究と、月経対処教育・啓発活動**を行っています。

研究の意義と将来展望

実践的な本研究は、月経のある人のウェルビーイングに貢献するのみならず、ジェンダー平等や支え合う共生社会の実現への一歩になると考えます。将来的には、月経への理解とケアが広がり、生理用品がトイレに設置されていることが当たり前になることが期待されます。



生理用品無償提供用 MeW ディスペンサー



能登地震避難所での支援

特 許 特願2021-156117

論 文 杉田映理・新本万里子(編)2022『月経の人類学—女子生徒の「生理」と開発支援』世界思想社
杉田映理「フェムテックから月経教育を問う」『現代思想』2023年5月号, p.s191-196
Nguyen, Angela-Maithy; Maroko, Andrew; Sugita, Eri et al. Exploring the availability and accessibility of menstrual friendly public toilets (MFPTs) in urban spaces: A global multi-city audit study. Health & Place, 2023, Volume 97, p.103412-. doi: 10.1016/j.healthplace.2025.103412

参 考 URL <https://mew.hus.osaka-u.ac.jp/>
<https://ic.hus.osaka-u.ac.jp/mhm/>

キーワード 月経、トイレ、生理用品、ディスペンサー、ジェンダー平等



外国人・移民に向けた教育政策を 制度から問いなおす

人間科学研究科 教育環境学講座

教授 園山 大祐

 <https://researchmap.jp/read0059967>



研究の概要

国内外の教育政策や教育制度に関心を持っています。具体的には、日本社会の国際化は教育界においても喫緊の課題となり、戦後の教育体制の見直しを迫られています。たとえば、日本の外国人の教育保障は海外と比べてときに、どのような異同点が、いつから、どのようにつくられたのでしょうか。教育機会以外にも、無償制度の範囲など、どこまで保障されているのか、戦後の政策史と制度改革を検討してきました。特に欧州諸国との比較から、日本の教育政策や教育制度の課題を明らかにしてきました。

外国人だけではなく、国籍に関係なく異文化に育つ子どもにとって開かれた教育政策・制度とは何か。こうした問題により早くから取り組んでいる先進地域との比較から研究に取り組みできました。国内の国際化として外国人、外国に出自がある人、国際結婚、帰国生、無国籍、など多様な背景を持った児童生徒に応じた多様な学びを保障するための政策や制度について研究をしています。

なかでも、多民族国家として社会統合に腐心するフランスの教育政策や、EU各国との比較教育制度研究に取り組んでいます。いかなる社会的なマイノリティにも開かれた学校教育とは何か、公教育制度のあり方を考究しています。

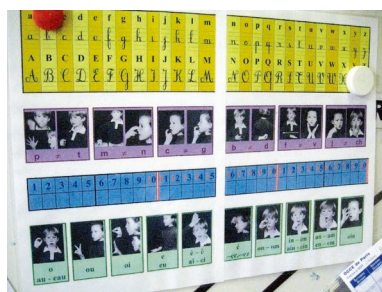
研究の意義と将来展望

本研究は、学校教育をめぐる差別、障害、格差の実態やその撤廃、縮小、是正に向けた取り

組みについて、当事者性を基調とした、現場で得たデータを駆使して、教育の包摂や普遍化へ向けた実態に迫ろうとするところに特徴があります。国内外の教育政策や制度改革において、グローバルに考えながら、ローカルな課題に応えようとするものです。マイノリティ文化への理解と共に、共生社会の実現の礎となる学校教育の政策や制度の実現を目指しましょう。



EUのプログラムを通じた国際交流（フランスの中学校）



障がい児教育：手話の教材（フランス）

特許

- 園山大祐編 (2025) 『移民の教育政策を制度から問いなおす』 勁草書房
 園山大祐編 (2024) 『海外の教育のしくみをのぞいてみよう』 明石書店
 園山大祐編 (2024) 『若者たちが学び育つ場所』 ナカニシヤ出版
 園山大祐監 (2022) 『教師の社会学』 勁草書房
 園山大祐編 (2021) 『学校から離れる若者たち』 ナカニシヤ出版

参考URL <https://educational-policy.hus.osaka-u.ac.jp/>

キーワード 移民教育、比較国際教育、異文化間教育、教育社会学、フランス・EU



人間科学で創る安全社会： ヒューマンファクターからレジリエンスへ

人間科学研究科 人間行動学講座

准教授 **中井 宏**

Researchmap http://researchmap.jp/nakai_164



研究の概要

本研究分野は、人間の心理と行動の科学的理解を通じて、現代社会に内在する多様なリスクを低減し、安全行動を促進することを目的としている。特に交通場面を中心に、産業・医療・教育などの現場で発生する事故やヒューマンエラーの心的過程を明らかにし、安全で快適な社会の構築を目指す。実験室内での心理学実験や行動観察、企業・行政との調査等を組み合わせ、行動経済学や認知科学の知見を応用して安全管理手法や安全教育プログラムを開発するなど、実社会で役立つ行動科学的手法を探索している。また、Safety IIの理念に基づき、人と組織が変化や不確実性に柔軟に対応し、安全を維持・再構築できる「レジリエンス」の強化にも取り組んでいる。

「なやかな安全システム」の構築を行動科学で支援する。将来は、①現場実践に基づく教育・介入モデルの深化、②産業横断的な安全標準化への貢献、③レジリエンス強化を目的とした実務家との協働拡大を進め、安全で豊かな社会の実現を目指す。



ドライビングシミュレータを用いた交通心理学的研究

研究の意義と将来展望

安全行動学は、事故を減らすにとどまらず、社会全体のウェルビーイングと持続可能性を高める意義を持つ。安全性の向上は、企業では生産性や従業員定着率の改善、行政では交通事故削減や市民の安心醸成に寄与する。また、Safety IIとレジリエンス・エンジニアリングの視点から、人と組織が変化やトラブルに適応し、安全を維持・強化できる「し



鉄道整備工場における安全管理について現場見学

ソーシャルイノベーション

特許

馬淵龍・中井宏．診療放射線技師における焦りの生起要因と業務への影響．日本放射線技術学会雑誌．2025．81(9)．25-1569．doi: 10.6009/jirt.25-1569

中井宏・岡真裕美 (2024) 『事故・ケガで我が子を死なせないために——子どもを全力で守る本』いそっぶ社．ISBN: 4910962077

lio, Kentaro; Nakai, Hiroshi; Usui, Shinnosuke. Effects of speed reduction marking patterns on simulated driving speed and lane position. Transportation research record. 2022, 2677(2), 880-897. doi: 10.1177/03611981221108979

中井宏．あおり運転に関する研究の概観と抑止策の提案．交通科学．2021, 52(1), 3-12. doi: 10.34398/kokaken.52.1_3

参考URL <http://app.hus.osaka-u.ac.jp/>

キーワード 安全行動、ヒューマンファクター、安全教育、安全管理、レジリエンス・エンジニアリング

加齢、病気、死に伴う心の変化を よりよく理解するために

人間科学研究科 人間行動学講座

准教授 **中川 威**

Researchmap <https://researchmap.jp/spinkids>



研究の概要

私たちは、生きることの量を重視し、人生100年時代とも呼ばれる長く生きられる社会を築いてきました。しかし、生きることの質に目を向けた時、幸せに生きられる社会を築いてきたのでしょうか。私は、「若い、病み、死ぬとしても、人は幸せに生きられるか」という問いに答えるため、同じ人を何日も、何年も追跡する研究を行っています。こうした研究は多くの方々の協力を得て行なっています。身体、社会、心理の変化を捉えるために、医学、社会学、心理学といった様々な学問分野の研究者の協力を得ています。また、病気や障害のある人を追跡するために、自治体の協力を得ています。

のため、こうした研究には、政策と実践にエビデンスに基づく示唆を提供できる意義があります。現在、遠方の研究機関と自治体の協力を得て、要介護者と家族を追跡する研究を行なっています。将来、学内外の研究者や近隣の自治体からの協力を得て、病気や障害のある人を追跡する研究の展開を願っています。

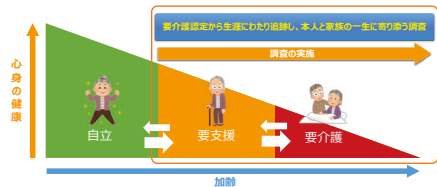


図1 病気や障害のある人を追跡する研究の構想

研究の意義と将来展望

平均寿命と健康寿命の差が広がり、病気や障害のある期間が長くなり、医療費や介護費が増えています。私の研究は、こうした課題の解決に役立つと考えています。具体的には、病気や障害のある人を追跡することで、医療や福祉サービスが心身の健康の維持や改善に有効かという問いへの答えを得られます。そ



図2 要介護者と家族を追跡する実施中の研究

ソーシャルイノベーション

特許

論文

Nakagawa, Takeshi; Hülür, Gizem. Social integration and terminal decline in life satisfaction among older Japanese. The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences. 2020, 75(10), 2122-2131. doi: 10.1093/geronb/gbz059
Nakagawa, Takeshi; Noguchi, Taiji; Komatsu, Ayane et al. The role of social resources and trajectories of functional health following stroke. Social Science and Medicine. 2022, 311, 115322. doi: 10.1016/j.socscimed.2022.115322

参考URL

<https://www.ncgg.go.jp/ri/lab/cgss/departement/social/yorisoi.html>

キーワード

加齢、高齢期、ウェルビーイング、ケア



対話と市民参加にもとづく 科学コミュニケーションの実践研究

全学教育推進機構 全学共通教育部門／人文学研究科 人文学専攻 科学技術社会論専門分野

教授 **中村 征樹**

Researchmap <https://researchmap.jp/nmasaki>



研究の概要

生成 AI や顔認証技術の普及、ゲノム編集技術の応用など、現代の科学技術は利便性の向上と同時に、ディープフェイクやプライバシーの浸食、生命への介入といった新たな課題を伴いながら、人々の生活様式や制度設計に影響を及ぼしている。こうした状況のもとで、科学技術に関する意思決定を専門家に全面的に委ねるのではなく、市民・地域社会・さまざまな実践者と専門家が協働して形成していくことが不可欠となっている。本研究では、科学技術と社会をつなぐ「科学コミュニケーション」を、効果的な情報発信にとどまらず、専門家と社会との対話・関与・共創を軸とする枠組みとして構想し、その実践的モデルを確立することを目指している。

研究の意義と将来展望

本研究の意義は、科学技術をめぐる社会的課題に対し、市民と専門家がともに問いを立て、考え、価値を形成していくための実践的枠組みを提示する点にある。生成 AI や顔認証、ゲノム編集といったテクノロジーでは、その是非や望ましい利用のあり方について判断が分かれる。こうした課題に対応するためには、望ましい将来のビジョンを専門家と市民がともに描き出していくための対話の場と共創の仕組みが不可欠である。本研究では、こうした観点から、専門家と社会との関係性そのも

のを再構築するプロセスについて検討する。

将来的には、本研究で蓄積された知見と実践を基盤として、自治体・企業・NPO 等との連携による共創型プログラムの展開が期待される。例えば、地域課題や先端科学技術をテーマとした対話型ワークショップ、市民参加型の調査・研究（シチズンサイエンス）などが考えられる。



阪大ワニカフェにおける対話の様子



鹿児島で開催したサイエンスカフェの様子

特 許

論 文

中村征樹, 「シチズンサイエンス：市民の科学研究への多様な関与」, 情報の科学と技術, 2023, 73(11), 476-479. doi: 10.18919/jkg.73.11_476
 Miura, Asaki; Yamagata, Mei; Nakamura, Masaki et al. Who trusts in scientific research? Cross-national surveys of Japan, the United Kingdom, and the United States. Journal of Science Communication, 2024, 23(8), A03. doi: 10.22323/2.23080203
 Nielsen, Kristian H.; Balling, Gert; Nakamura, Masaki et al. Sipping science: The interpretative flexibility of science cafés in Denmark and Japan. East Asian Science, Technology and Society, 2015, 9(1), 1-21. doi: 10.1215/18752160-2832109
 中村征樹 編著 (2013). ポスト3・11の科学と政治. ナカニシヤ出版. ISBN: 9784779507229

参考URL

キーワード

科学コミュニケーション、サイエンスカフェ、シチズンサイエンス、対話、市民参加

「かわいい」感情の理解とその実社会への応用

人間科学研究科 人間行動学講座

教授 入戸野 宏

Researchmap <https://researchmap.jp/hiroshinittono>



研究の概要

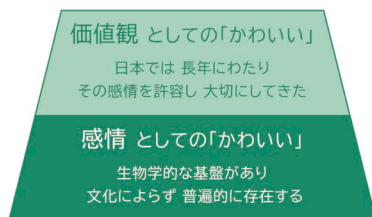
「かわいい」は、日常生活でよく見聞きする言葉であるとともに、日本を特徴づけるポップカルチャーです。「かわいい」文化は、日本の特殊性を強調した文化論で説明されることがありますが、私たちは、心理学・行動科学の立場から「かわいい」を感情とみなし、研究を実施してきました。「かわいい」という感情は社会的な接近動機づけを伴うポジティブな感情であり、その感情は文化に依存しない生物学的な基盤を持つが、日本では「かわいい」感情を許容する社会的背景があったために、世界に先駆けて「かわいい」文化が発展したと考えています。

研究の意義と将来展望

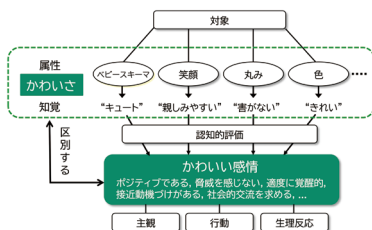
現在の日本では、ブームとしての「かわいい」は落ち着き、一人ひとりに合った身近な「かわいい」の意義がようやく理解されるようになってきました。しかし、SNSの影響で見た目の「かわいさ」が偏重されたり、子どもに対する虐待やバットの遺棄が大きな社会問題となったりしています。「かわいい」という感情に伴うやさしさやケアといったポジティブな側面を活かすためには、「かわいい」と感じる心の仕組みを理解することが大切です。単に「かわいい」を消費するのではなく、

一度立ち止まって「かわいい」をしっかりと味わうことにより、衝動性を抑えて穏やかな喜びを感じられるようになります。このような考え方にに基づき、私たちは「かわいい」感情を活用した瞑想（メンタルトレーニング）法を開発し、その普及にも取り組んでいます。

「かわいい」の二層モデル



「かわいさ」と「かわいい」感情



ソーシャルイノベーション

特許

入戸野 宏 (2019). 「かわいい」のちから：実験で探るその心理 化学同人 ISBN: 9784759816815

論文

Nittono, Hiroshi. The two-layer model of "kawaii": A behavioural science framework for understanding kawaii and cuteness. *East Asian Journal of Popular Culture*, 2016, 2(1), 79-95. doi: 10.1386/eapc.2.1.79-1
Nittono, Hiroshi; Lieber-Milo, Shiri; Dale, Joshua Paul. Cross-cultural comparisons of the cute and related concepts in Japan, the United States, and Israel. *SAGE Open*. 2021, 11(1), 1-16. doi: 10.1177/2158244020988730
Nittono, Hiroshi; Ohashi, Akane. Considering cuteness enhances smiling responses to infant faces. *Japanese Psychological Research*. 2024, 66(4), 462-472. doi: 10.1111/jpr.12514

参考URL

<https://cplnet.jp/>

キーワード

かわいい、感性、心理学、実験、調査

